



千葉動力車

幕電

寒中に屋上で有機溶剤作業？

恒常的入体制で提案撤回！

幕張電車区当局と支社運輸部は、またしても有機溶剤の塗装作業を現場に強制しようとしてきた。「環境整備」「5S運動の一貫」と称して、電車区庁舎屋上の有機溶剤塗装作業をやらせようとしたのである。

まさに非常識！

一月一四日に支社から提案され、その日のうちに撤回された作業内容は次のようなものであった。

- (1) 屋上の清掃・水洗い 三日間、作業者十名。
- (2) 塗料や塗装器具等の搬入 三日間、二〇名。
- (3) 下塗り一日、十名。
- (4) 上塗り一日、十四名

一月一六日から、事務係や技管も含め、この作業に動員しようとしたのである。これ自体がまさに非常識だ。本来業務とは全く関係のない「作業」に本来の仕事をつちのけにしてかりたてようというのである。しかも、有機溶剤を使用する危険作業であり、かつこの一月の寒空に、「屋上の水洗い」から始まるのだ。有機溶剤を扱わせるためには、「特殊健康診断」も実施しなければならない。一体何を考えているのか、常識を疑う

しかない発想だ。

何故こんな事を

幕張電車区の屋上は、誰も上ることなどない場所だ。一体何故、何十人も動員して意味のない危険作業をやらなければならぬのか？ 発想自体がどう考えてもまともではない。

結局区当局は、交検庫の違法な塗装作業で余ってしまった、山積みになって二〇〇缶もの有機溶剤の「処理」に困って、こんな意味のない塗装作業を思いついたとしか考えられない。しかも、「今度は野外であり換気の問題はないから違法作業にはならないだろう」「交検庫のときは動労千葉に文句をつけられて中止に追い込まれたが、意地でも有機溶剤作業をやらせろ」というのだ。

何の反省も無し

ここには、人命に関わる違法な危険作業を強制したことに對する真剣な反省はひとケケラもない。実際、幕張電車区当局は、交検庫の塗装作業が中止された後も、社員に対して謝罪するどころか、中止になった経過ひとつ説明していない。何故こんなことを引き起こしてしまったのか、有機溶剤作業であることを知らせることもなく強制したことの問題点や、このような事態のなかから何を教訓とするのかを明らかにすることぐらいは、

管理者の責任として最低限やらなければならないことなはずだ。しかしそれも一切なく、ひらき直り続けているのである。

そして今度は、意地になってもう一度有機溶剤作業をやらせようとしたのだ。こんな管理者はもはや管理者として認めることはできない。

五九分三五秒？

この他にも幕張電車区では、完全にバランス感覚を失った管理者によって、様々な問題が起きている。例えば、終了点呼の開始時間の変更された。何と「一六時五九分三五秒から開始する」というのだ。終了点呼の時間が二五秒！。このため、必要な事項が全く伝達されなかったり、翌日の勤務が混乱したり様々な問題が起きている。

これは、当局自身が主張してやまなかった「点呼の重要性」を自ら否定したに等しいことだ。これまで幕電の終了点呼は、勤務終了の三分前から行なわれていた。特別早かったわけではなない。「一分たりとも自由にはさせるな」という発想のもとに、こんなことが起きているのだ。とくに、区長や首席など責任ある立場にあるはずの者が、労務政策とも呼べないような労働者ができなくなっている。この点呼問題にしても、二五秒前などにしてしまったら、自ら

との整合性はどうか、点呼という定めそのものの意味と関係でどうなのか、そもそも二五秒前などとするに何の積極的な意味があるのか、業務上や安全上の問題など何かあったらどうするのか等、ごく基本的な問題が一切視野に入らないのだ。これは恐るべきことである。現実に、区長や首席のこの決定に對しては、助役までが、現場から理由を聞かれると、苦虫を噛みつぶしたような顔で黙ってしまふ状態だ。ただ一言、「上が決めたことだからよ」と。

こんな状態のなかで働かされる者はたまったものではない。革マル結託体制のもとでの十年間は、ここまでJRの会社組織を歪めてしまったのだ。

構内・仕業の融合化を許すな

幕電では、構内と仕業の融合化など新たな合理化攻撃が画策されている。JR総連・革マルは、当局の完全な手先となって構内作業の全面的な外注化まで認めようとしていると言われている。これは、検修労働者の売り渡しに他ならない。全力で闘いに起ちあがろう！

九〇・三スト支配介入中労委

と き 二月 六日(木)
一〇時から
と ころ 東京・中労委
指定列車 千葉⑨ 8時51分